

《9・11 事件の真相》

1 . 世界貿易センターに突入したジャンボ旅客機は遠隔操作・自動操縦か?!

ブッシュ政権によって 9・11 事件の犯人グループとされたアラブ人「テロリスト」たちのパイロットとしての経歴は、どう考えてもお粗末に過ぎる。事件後マスコミがこぞって報道したところによると、彼等の中の数人が何度か米国内で飛行機操縦の訓練学校に通っていたが、まともに修了した者はおらず、成績不良で途中で追い出されたような者ばかりであった。

そのような連中に、ジャンボ旅客機を操縦してあのように絶妙な世界貿易センター(WTC)突入など出来るはずがない。彼等アラブ人「テロリスト」たちによるハイジャック機の突入と云う米国政府の公式発表はでっち上げではないか?! そうだとすると、一体誰があのジャンボ旅客機を操縦していたのか? 恐らく、機長席には本当の機長が座っておりハイジャック犯などは最初から搭乗していなかったかも知れない?!

9・11 事件の後、アメリカは早々とアフガニスタンで戦争で始めたが、そこでは無人航空機(UAV)を本格的に戦線に投入した。この戦争で、アメリカは、偵察は云うに及ばず機銃掃射からミサイル攻撃にまで大々的に遠隔操作の無人機を使い始めた。これは、目下アメリカだけが使える画期的な新兵器で、21 世紀の戦争を様変わりさせるものと云われている。

この遠隔操作で無人機を自由に操縦できる装置が世界貿易センター(WTC)に突入したジャンボ旅客機にも事前にこっそりと組み込まれていたとしたら、どうなるか? ……空港を飛び立ったジャンボ機は機長による操縦が突然不能になり、機体は勝手に進路を変更してニューヨークのマンハッタンに向う。機首に取りつけられたカメラからの映像が遠隔操作者のモニターに映る。やがてWTC 内部から発信される誘導電波を目標に自動操縦された機体は、予め設定されたWTC の突入個所をめぐって飛び込んで行く。事前にWTC 内に設置されていた誘導装置は、建物の爆発・炎上・崩壊によって跡形もなく瓦礫の山に埋もれてしまって、その痕跡も残らない。…どうやら、これが昨年 9 月 11 日のジャンボ旅客機のWTC 突入事件の真相のようだ。

そうだとすれば、目下世界中でこのように誘導装置を使って大型航空機を自由に遠隔操縦できるのは国防総省やCIA に属する米国政府機関しかありえない事実から、この事件はブッシュ政権内部の謀略機関による犯行としか考えられない。

そもそも、ブッシュ政権は、成立当初から正当性を欠いていると見なされて、9・11 事件までは国内でも非常に不人気であった。この背景には、先ず、ブッシュ本人が、かつてCIA 長官・副大統領・大統領を歴任した父親の力に全面的に支えられた凡庸な 2 世政治家である上に、選挙運動中に見せた知性の低さから、米国大統領としての適格性が問われていた事情がある。

しかし、ブッシュにまつわる最大の問題は、何と云っても一昨年末の大統領選挙の結末である。彼は、対立候補のゴア前副大統領に総得票数では完全に敗れながら、実弟が知事になっているフロリダ州で数々の謀略によってゴアよりわずかに数百票多い「有効得票数」を勝ち取り、あとは父親の時代に任命した右翼判事が多数を制する連邦最高裁を強引に介入させて無理やりに大統領に収まったのである。このような経緯があって、世の有識者からは、ブッシュ一味がその絶大な政治力を駆使してクーデターまがいのやり方で政権を奪ったと非難されていた。

それが何と、9・11 事件によって一挙に態勢を挽回し、国内ではブッシュの支持率も急上昇することになった。これにはマスコミが総動員されて国家の一大事が叫ばれ国民の危機感を煽って、皆が星条旗を振って大統領のもとに結集しなければ非国民であるかのような雰囲気追い込まれたからである。

その結果、アメリカは、国を挙げて、ブッシュ政権が 9・11 事件の数ヶ月前から準備していたアフガニスタン侵攻作戦に突入した。また、国内では、テロ対策の名のもとに法手続き抜きで次々とアラブ系住民やイスラム教徒が逮捕・拘禁され、FBI やCIA は云うに及ばず州兵まで総動員して国民を監視し政府批判を抑圧するとうる異常な「戦時体制」になってしまった。以来、アメリカは一変し 1930 年代のナチス・ヒトラー政権下のドイツに酷似してきた。

いずれにしても、9・11 事件で一番得をしたのは誰か? それは、云うまでもなくブッシュ政権である。かつてアメリカが第 2 次世界大戦に突入するに際して、時の大統領ルーズベルトが、日本軍の暗号通信を解読して奇襲作戦を知っておりながら国民にもハワイ現地軍にも知らせず、日本軍の真珠湾攻撃を成功させ、“Remember Pearl Harbor!” を合言葉にして一挙に国民を戦争へと駆り立てて行った。

これまでのところ、ブッシュ政権は、シナリオ設定から演出まで全てを自らの手でやってのけることで、このルーズベルトの策謀をしのご前代未聞の陰謀を成功させようとしている。その狡猾粗暴さと蛮行規模の大きさには世界中が度肝を抜かれ、以来諸国の指導者たちは戦々恐々としてブッシュ政権の言動を見つめてきた。

9・11 事件がブッシュ政権の謀略犯行であることを傍証するもう一つの有力な事実は、当初から事件の真相解明を国民から強く要求されながら、ブッシュ政権は、議会による調査委員会の設定にも応じず、逆に事あるごとに真相解明の試みを妨害し責任逃れの隠ぺい工作を続けてきたことである。

事件当初からの公式発表では、ブッシュ政権は、テロ・グループの所在や活動について事前には全く知らず、事件は完全な不意打ちであったと主張してきた。ところが、事件の翌日には、早々と司法長官が「犯人」グループとして 19 人のアラブ人らを顔写真まで掲げて発表し、翌月には、世界中から立証責任を問われながら、それに応えようともせず、テロリストの根拠地を叩くと称して強引にタリバン政権下のアフガニスタンに対する一斉攻撃を開始した。

その後、国民の関心と非難が事件を事前に察知し阻止できなかつたと云う政府機関(特に F B I と C I A)に向けられ、その責任追及が厳しくなると、政府機関内での責任のなすりつけ合いが始まった。揚句の果ては、最近になって、テロリストらが飛行訓練を受けていたとされる地方の F B I 捜査官たちが早くから彼等の挙動不審をワシントン本部に報告して対策を具申ししていたにも拘らず理由もなく棚上げにされてきたことが分かり、現地担当官による公開の実名での内部告発まで出されて大問題となってきた。

こうして、ついに、F B I や C I A の各長官をはじめブッシュ大統領自身も、これまでの主張をひるがえし、具体性を欠く形ではあるが事前にテロリストらの陰謀を知らされていたと云い出す羽目になった。それでもなお、ブッシュ政権は、非常時に国家の機密情報を敵に知らせることになるとの口実で、公的な独立調査委員会による事件の真相解明を拒否する姿勢を変えていない。

これまでに事件の真相解明をめぐる明らかになったことは、ブッシュ政権の要人らが当初から事件との係わりで色々とうそをついてきたばかりか、事件の真相解明を執拗に妨害し阻止しようとしてきたことである。

この大事件によって一番得をしたのは彼等であり、その真相解明を一番渋っているのも彼等である。それだけに、彼等には世間に知られては大変困る真相があるに違いないと誰しもが考える。そこで、目下、9・11 事件がブッシュ政権の謀略犯行であるとする説は二通りに分かれる。

穏健善良な人は、ブッシュ等が長年よく知っているアルカイダ集団のテロ活動家たちを自由に泳がせて事件を起こさせ利用したのだとする、いわばヤラセ説をとる。しかし、色々として事件の事実関係を追及して真相解明に努める厳格良心派は、犯行の手口が超大国の国家機関にしか出来そうにない高度の技術や仕掛けを駆使した謀略工作によるものであることから、テロリスト・グループの仕業に見せかけて実はブッシュ政権内部の謀略機関がやったに違いないと推測する。

この内部犯行説は、9・11 事件の後、追い討ちをかけるようにしてテロリストに対する国民の恐怖と怒りを増幅させた炭疽菌事件(郵便物に炭疽菌を混入して民主党上院議員等に送りつけ数人の死亡者を出した)の成り行きとも符合する。この事件の場合も、混入された炭疽菌は、米国陸軍が細菌兵器として開発・製造した極めて特殊な人工炭疽菌であり、同陸軍内部の細菌兵器関係の秘密保管場所(複数)に厳重に保管されていて、世界中でそこからしか出てこない細菌であることが早くから判明しており、犯人割り出しも極めて容易であると見られていた。ところが、この事件に対するブッシュ政権の対応は極めて不可解で、F B I などの捜査機関は事件を棚上げ状態にして一向に犯人の割り出しをしようとはせず、うやむやにしようとしている。

このように、昨年 9 月 11 日以来の世界中を震撼させた一連の大事件については、アメリカと云う覇権超大国の現政権が謀略的に係わっている以上、結局は事件の真相を一々証拠を挙げて解明することは不可能であろう。とは云え、世界中を欺き人類全体を未曾有の戦乱に巻きこむことになる新たな「反テロ戦争」の口実とされ、それに合わせて我が国日本の国家政策をも大転換させることになった 9・11 事件をこのまま見過すことはできない。この際は、何としても事の真相を追及して、分かったことを世の中に知らせ、皆で災いの元を断つように全力を尽くさなければならない。

そこで、とりあえず、ブッシュ政権の謀略犯行説を検証するために幾つかの具体的で分かりやすい証言・映像・事実考証などを集めてみた。以下は、こうした情報のごく一部でしかないが、9・11 事件の真相を知り延いては内外情勢の今後の展開を考えるための参考にしてもらいたい。

1 - 1 . ジャンボ旅客機操縦の難しさについて

『Boeing 767 の操縦とハイジャックテロ』

〔以下は『航空情報』誌の依頼により AURDO 前田仁機長が現役パイロットの視点で事件を分析し考察した記事 (2001 年 10 月執筆) からの抜粋、出所原文は<http://www.remus.dti.ne.jp/%7Ewings/maedahijack.html>〕

B 767 は 1982 年 7 月に米国で形式証明を取得した、いわゆる第四世代のジェット旅客機である。経済性に優れ騒音が小さく 2 名で操縦できるように最新のデジタル技術を駆使したものである。この技術により離陸から着陸までの操縦操作を自動化出来るようになった。FMC(フライトマネージメントコンピューター)は、フライトディレクター「FD」(飛行監視装置)、オートパイロット「AP」(自動操縦装置)、オートスロットル「AT」(自動推力装置)へ情報を送り、バーチカルナビゲーション「VNAV」とラテラルナビゲーション「LNAV」を行う。

〔中略〕

B 767 には B 767-200、-300、-300ER(長距離路線仕様)、それに形式証明を取ったばかりの-400 型まであり、ここでは-300 型 ER で説明してゆく。-300ER の大きさは、幅 47m、長さ 55m、高さ 16mほどあり、重量は 110 トン~160 トンと使用目的(短距離〔伊丹~松山〕から長距離路線〔成田~シドニー〕)により幅があり、長距離飛行の場合には機体重量の約 35%が燃料の重さになる。

〔中略〕

操縦室には、前方に向かって左側に機長、右側に副操縦士が座り、彼らの後ろに 2 席のジャンプシート(補助席)が用意されている。オーバーヘッドパネル(天井)には、油圧、電気、燃料、与圧、空調などの調整装置と IRS(慣性航法装置)、ボイスレコーダー(音声記憶装置)、APU(補助動力ジェットエンジン)の始動スイッチ「SW」、ワイパー SW、ライト SW、EVAC(非常脱出指示)SW、燃料放出 SW、防氷調整 SW、エンジン始動 SW、操縦室ドア開錠電磁キーやインターフォーン選択 SWなどが配置されている。グレアシールド(前方窓下の棚)手前に FD、ATと AP の選択 SW類があり、両側に VOR(超短波全方向式無線標識)の受信機が配置されている。両パイロットの正面には飛行に必要な計器が同じ配列で、それぞれ並んでいる。

〔中略~離陸・飛行・着陸などの操縦技術を詳細に説明〕

B 767 の限定変更訓練に投入されるパイロットの資質は、事業用操縦士、マルチエンジン(双発以上)資格、計器飛行証明資格を持っていることが最低条件である。

- a . G S (座学) ~ B 767 の各システムを理解する為の G S を約 1 ヶ月半 CRT (視聴覚装置)で行う。機体、電気、油圧などシステムごとにまとめられている CD をコンピューターに入れ、画面とレシーバーから流れる解説を聞き勉強する。内容は写真、図面、系統図、更にそれらが作動して変化してゆく状態をアニメ化したもの等である。理解できない場合のみ、教官を呼んで説明を受けるセルフスタディー方式である。各システムの最後にテスト問題があり、80 点以上取れないと次ぎのシステムへ進めない。CD は、何度でも再生できるがテストは 1 回だけの再生でお終いである。不合格の場合は教官へ申し出ると、再試験が出来る。
- b . F B S (システムトレーナー)訓練(2 週間) ~ システムトレーナー(計器、SW、レバー、表示ランプなどが実際と同じ作動や表示をする)装置を使い座学で学んだ内容を実際に操作する訓練。通常のエンジン始動、代替操作から緊急時の SW ワーク(操作)までを学ぶ。
- c . F M C トレーナー(1 週間) ~ F M C トレーナー装置といい、F M C 表示器、入力テンキーパッド、これらに連動されたコンピューターと F M C モニター(T V 画面にルートや飛行場が表示され、ミニチュア飛行機が画面上を動いてゆくもの)を使って F M C 操作に精通する訓練。F M C の通常入力方法、応用オペレーションと故障時の対処方法を学ぶ。
- d . F F S (シミュレーター)訓練(30 時間 = 1 ヶ月半) ~ フライトシミュレーターを使い通常飛行と異常運航からの回復操作などを訓練する。(中略)
- e . ローカル訓練(実機訓練)(6 時間 = 1 週間) ~ 訓練所が航空局の指定養成施設の許可を持っていないと実機試験もしなければならない。本物の B 767 を使い、エアポートワーク(場周飛行)でタッチアンドゴー(離着陸)の訓練を受ける。
- f . ライン O J T (見習) G S (10 ~ 12 日間) ~ 航空会社が持っている全路線と使用する空港についての知識や特性などを学ぶ。
- g . ライン O J T (80 ~ 120 着陸 = 2 ヶ月) ~ 乗客を乗せて飛ぶ実路線の飛行機に、機長、副操それに「見習い操縦士」の 3 名編成で乗務し、副操見習訓練を受ける。正規の副操はジャンプシートで各操作の監視業務をして、何かあれば見習と交代する。ここでは航空局の試験は無い。(社内資格)会社試験官が合格を出すと、初めて正規の副操縦士として発令され、乗務ができるようになる。最初の G S から正規の副操として乗務するまでに、最短でも半年間にかかる。

〔航空テロ犯人達の操縦技術について〕想像であるが、今回のハイジャック&自爆テロ事件の犯人達の操縦技術には、事前にかかなりの訓練が行われていたと思われる。この本文を読んだ読者の方も、なまじな操縦技術(小型機の操縦資格)でB767を飛ばすことが難しい事を認識したはずである。それは、ハイジャックが行われた際、それぞれ、かなりの高空にあったと思われ、飛行機の全システムは自動操縦で西海岸へ向かっていたからである。〔以下省略〕

公表されたハイジャック機の飛行経過

ハイジャックされた旅客機4機は、航空交通管制機関に航跡を突きとめられないようにトランスポンダー(電波の受信-再発信装置)のスイッチが切られていた。アメリカン航空11便とユナイテッド航空175便の両機は、ロスアンジェルス行のボーイング767型機で、ボストンのローガン空港をそれぞれ現地時間午前7時59分と7時58分の1分以内の間隔で離陸した。連邦航空行政局航空交通管制部の管制官によると、それら両機は初め北東の方角へ向かい、ある時点でぶつかるほど近づいたと云う。この奇妙な行動はハイジャックされた後の飛行航跡ではないかと考えられている。

ハイジャックは離陸後早い時期に行われたようで、アメリカン航空11便のトランスポンダーは機体がニューヨークにコースを変えたときに切られたが、機体は主要レーダー上では依然として映っていた。時折パイロットが無線スイッチを押したままでハイジャック犯達の会話が送信されていたので、これを聞いた管制官がハイジャックであることを知り、警備部門に警報を出したと云われる。その後、乗客81人と乗務員11人を乗せたアメリカン航空11便は、南に方向を変え、8時45分に世界貿易センター(WTC)のノース・タワーに衝突した。(飛行時間は7時59分~8時45分の46分)

他方、乗客56人と乗務員9人を乗せたユナイテッド175便機は、途中で進路を南西方向に変え、ニューヨークを通過してから再び進路を北東に変えて、WTCに向かった。同機は、衝突の直前に機体を左に傾けて9時5分にサウス・タワーに突入した。(飛行時間は7時58分~9時05分の1時間07分)

ハイジャックされた3機目のサンフランシスコ行ユナイテッド航空93便機は、午前8時01分にニューアーク空港を離陸し、一旦南へ向かった後、1時間ほど西に向って飛んでから東へ進路を変えた。同機が首都ワシントンに向かうコースに変わったことを知ったホワイトハウスは、急いで職員を避難させた。

同機が2時間の飛行中には、乗客や乗務員から携帯電話によって機内の様子が伝えられていたと云う。パイロット二人と客室乗務員らは、乗客と一緒に機体後部で犯人らの監視下におかれ、乗客たちは生き残りをかけて犯人制圧の機会をうかがっていたとも伝えられている。緊急発進した空軍のF-16戦闘機は、ハイジャック機飛行の後半部分を尾行していたが、機体は突然急角度で降下し、10時10分にピッツバーグ市の南東郊外に墜落した。この墜落が犯人らの意図したことであったかどうかは、手がかりもなく未だ不明であるとされている。いずれにしても、このユナイテッド航空93便のB757型機(乗客38人、乗務員7人)は、ピッツバーグから80キロほど離れたジョンスタウン近くに墜落した。(飛行時間は8時01分~10時10分の2時間9分)

4番目のハイジャック機、ロスアンジェルス行アメリカン航空77便機(乗客56人、乗務員6人)は、午前8時10分、ワシントン郊外のダラス空港を離陸。同機は、一旦西に向った後、急に東へ進路を変えレーダーから姿を消した。しかし、それがトランスポンダーを切られたことによるのか或いは低空飛行したことによるのかは明らかでない。同機は、ワシントン市上空に飛来しポトマック川を越えて、9時40分にペンタゴンに突入したと云われている。(同機の飛行時間は8時10分~9時40分の1時間30分)

1-2. 「テロリスト犯人」たちの航空機操縦能力について

アメリカン航空77便機は、午前8時10分にワシントン郊外のダレス空港から離陸し、午前9時40分に、国防総省庁舎(通称、ペンタゴン)に突入したとされている。その翌日、9月12日のワシントン・ポスト紙は、同機が「並はずれた技能で操縦されており、ハイジャック犯の中にはよく訓練されたパイロットがいたと考えられる」と報じている。

しかし、その後の新聞報道では、このアメリカン航空77便機を操縦したとされるハニ・ハンジョアと云う男のパイロットとしての腕前は極めて怪しいものであった。彼は、事件直前の8月中旬にメリーランド・フリーウェイ空港にやってきて空港所有機の借用申請をしたが、パイロット熟練度の検査を受ける必要から飛行指導員が同乗してセスナ172型機で3回飛行テストをされ、単独飛行はとて無理だとして許可されなかったと云う。

このハニ・ハンジョアについては、最近のニューヨーク・タイムズ紙(2002年6月19日)が詳しく報じている。それによると、彼は、サウディアアラビアからやってきてアリゾナ州で飛行機の操縦を習おうとしたが、英語もまともに出来ず、空中飛行を怖がり、能力不足で初歩課程もなかなか修了できなかった。結局は5年がかりで

少なくとも4回飛行学校を変え何百時間も実地飛行をさせられて、1999年4月にやっと複エンジン級の商用免許を取得した。その2年後の2002年2月に、ハニ・ハンジョアはフェニックスの飛行学校で旅客機操縦のための模擬操縦訓練を受けようとした。しかし、指導員たちは「彼がパイロットとしてあまりにもひどく、その上に英語もまともに話せないの、彼の免許が偽物ではないかと疑って連邦航空行政局に照会した」ほどであった。結局その飛行学校では、ハニ・ハンジョアは旅客機操縦課程には不適格で免許をとるのは無理であると云われて終わっている。

他方、アメリカン航空11便のハイジャック犯とされるモハメド・アッタと同じくユナイテッド航空175便のマーワナル・アル・シェヒの二人についても、ワシントン・ポスト紙(2001年9月19日)によると、フロリダ州ヴェニスにある飛行学校ホフマン航空で数百時間の授業を受け、更にサラソータ・ブラデントン国際空港のジョンズ航空飛行サービス社でも飛行訓練を受けようとしたが、どちらももうまく行かなかったと云う。そこでは、特にアッタの出来が悪く、二人とも初歩的なテストすらパスできなかったので、幾度が厳しく云われて去って行ったと云う。

やはりワシントン・ポスト紙(2001年9月24日)によると、同じくアメリカン航空77便のハイジャック犯と云われるナワク・アルハズミとカイド・アルミダはカリフォルニア州サン・ディエゴに滞在して現地の飛行学校に短期間通ったが、どちらも英語力がなく操縦も不適格とされて中退している。

以上要するに、9・11事件のハイジャック犯とされたアラブ人達の中に一流のパイロットがいたと云う話はこれまでのところ皆無であり、彼等についての報道では、どれをとってもジャンボ旅客機の複雑高度な操縦を巧みにこなす技能や飛行経験をもった者は出てこないばかりか、それとは逆のヘマな未熟者ばかりが浮かび上がってくるのである。これでは、誰が考えても、ブッシュ政権が9・11事件のハイジャック突入犯として指名したアラブ人達は、真犯人ではなく、陰謀として犯人に仕立て上げられただけだと考えざるをえない。

2. 世界貿易センターは爆発物で内部から破壊されて崩壊した？！



上の一連の写真に見られるような世界貿易センター(WTC)の崩壊は、ジャンボ旅客機の突入による火災の高熱で鉄骨が溶解したからだと云われているが、真相はどうか？

もし、突入機が遠隔操縦されていたとしたら、旅客機にはないはずの特殊な装置が搭載されていたに違いない。それが発見されるとテロ首謀者としては困る。突入だけで終わってれば、恐らく建物の火災と部分破壊ですみ、焼け跡から奇妙なものが見つかったかも知れない。ところが、建物全体が完全に崩壊してくれたので、そのような証拠は全て消滅してしまった。

もし、遠隔操縦であったなら、機のブラックボックスには「機が勝手に進路を変更している。操縦不能！ あっ、マンハッタンに勝手に向かっている！ 管制塔！ 管制塔！ 何でつながらないんだ。一体どうなっているのか...」と云ったような機長の悲壮な会話が録音されているのでなからうか。しかし、一機につき2台あると云われるブラックボックスはとうとう見つからなかったようだ。当局は犯人のパスポートが奇跡的に燃えずに発見されたとして指名犯人の存在を証明したかのように発表しながら、墜落時の火災や衝撃を想定して特別に頑丈に作られているブラックボックスが見つからないとは、実に不可解である。

WTCの下層階にあったFBIニューヨーク支部事務所が、ジャンボ機突入時の衝撃とは全く関係のない形で爆破されていたと云われている。そこには、グリーンSPAN連銀総裁やらユダヤ系投資銀行やらの犯罪捜査記録が保管されていたそうだが・・・?!

このFBIニューヨーク支部でテロ対策部長をしていたベテラン捜査官ジョン・オニールがWTCの崩壊で犠牲になっている。彼は、FBI上層部がオサマ・ビン・ラディンやアルカイダ組織に対する捜査を何度も具申したが受け入れられなかったことに抗議して7月に辞任した。このオニール氏は、その後WTCの保安部長に再就職して、事件の前日に着任したばかりであった。彼は、ブッシュ族やその政権要人等とラディン達の裏の関係を知っていたはずで、彼とその捜査資料を消すのも爆破の目的であったかも知れない?!

このように9・11事件にまつわる不審な出来事が数多くあり、詮索すれば疑惑は尽きない。以下に、こうした問題点の裏づけになる証言を幾つか挙げてみよう。

2-1. 突入階よりはるかに下の階で複数の爆発・爆破があった!

[以下の出所原文は、<http://www.asyura.com/2002/war10/msg/304.html>]

9・11事件から半年後の今年3月12日午前のNHK衛星放送で放映されたフランス「F2ニュース」とスペイン「TVEニュース」は、崩壊したWTCのノース・タワー(最初に突入された高層ビル)での激突直後の内部の様子を次のように報じた。

まず、フランスF2ニュースでは、カメラマン3人を出演させて取材映像を流したが、彼等は日本でも「ガンマ・エクスプレス」のクレジットで何度も放送された一機目のノース・タワー突入映像を撮影した人たちで、その直後にノース・タワーに入ると右手奥に大きな炎が上っていたと云う。この時に彼等が撮影したWTC内部の映像は、今年9月11日に「完全版」としてフランスF2ニュースが放送するとのことである。

次に、スペインTVEニュースでは、ウィリアム・ロドリゲスと云う事件当時のWTC保安責任者へのインタビューの形で突入直後のノース・タワーの状況が説明された。事件発生当時、ロドリゲスは39階の事務所にいたが、発電機が何か爆発したと思い、急いで上司に報告しに行こうとした。その途中で、航空機の燃料に引火したかのような大きな爆発音を聞き、続いてもっと大きな爆発音を聞いた。すると「爆発だ!爆発だ!」と叫びながら人が駆け込んできた。その人は全身に火傷を負っており、右腕の皮膚が手袋のようにだらっとなっていた。

やがて、外の警備員から航空機が激突したと無線で報告が入った。強い衝撃を受けたと思ったら、館内放送で「65階がやられた」と告げられた。この爆発で、65階から44階までが崩れ落ちた。急いでプエルトリコにいる母親に電話をかけてから、建物の外に出ると、上階から飛び降りたと見られる人たちの遺体が目に入った。同じ頃に外に出た人が、上から落ちてきた瓦礫の直撃を受けて死ぬのを見た。その時ロドリゲスは、母親がぺしゃんこになった自分の遺体を見ることがないようにと祈ったと云う。

以上の他にも、ノース・タワーでは逃げ出した人々が20階~30階で数回爆発音を聞いている。アメリカン航空11便機が直接激突して炎上したのは94階から98階にかけてであるから、このような下層階での相前後する爆発は不自然であり、恐らく航空機激突とは別の原因によるものと考えられる。[事件当時のWTC内部の状況について詳細は、ニューヨーク・タイムズ紙の9・11事件特集“Accounts From the North Tower”(<http://www.nytimes.com/2002/05/26/nyregion/26NTOWER.html?pagewanted=all&position=top>)等を見よ]

因みに、WTC崩壊後の残骸はマンハッタン近くのスタテン島に運び出され、そこでは犠牲者の遺品と見られる時計やメガネなどが探し出されて保管してあるそうだが、事件解明のカギになる肝心のフライト・レコーダーやボイス・レコーダーの入ったブラックボックスは全く無視されており、又ビルの鉄骨材なども分析調査されることなく処分されていると云われる。

2-2. WTC内部で爆破があった!(ニューヨーク市消防隊員らの証言)

[以下の出所原文は、<http://www.konformist.com/911/bombs.htm> (NY Fireman: There were 'BOMBS IN THE BUILDING!')]

証拠と証言が集ってくるにつれて、WTCと近隣の建物を崩壊させたのは予め仕掛けられた爆弾であったことが解かってきた。9月12日、ニューヨーク市消防局の主任放火捜査官がテレビでWTCを崩壊させるために建物内部に爆薬が仕掛けられていたと語ったのだ。

〔以下（抄訳）の出所原文は、<http://people.aol.com/people/special/0,11859,174592-3,00.html>〕

ハーレム地区の第 47 団所属消防士ルイ・カチオリ(51 才)は、事件の翌日(9 月 12 日)に次のように語っている。私達は、航空機激突の後、最初に第 2 タワーに入った者です。私は、消火器を持ってエレベーターで 24 階に上り、従業員を脱出させるポジションについていました。「爆発」が起きるまで、そこにいました。私達は、建物の中に爆発物が仕掛けられていたと思います。私はもう一人の消防士と一緒にいてくれるように頼みましたが、それは正解だったようです。その後、私たちはエレベーターに閉じ込められたが、彼が脱出用の工具を持っていたので助かりました。

階段の吹き抜け部分には約 500 人が閉じ込められていたと思います。集団的な混乱状態でした。電気は消えて真っ暗でした。皆が泣き叫んでいました。私達は酸素マスクを被り、人々に酸素を分け与えていました。私達の中には、脱出できた者もできなかった者もいます。少なくとも 30 人の消防士が行方不明になっています。私は勤続 20 年目で、今は引退を真剣に考えています。今度の事件のせいでね。

最初の放送が建物の燃えている様子を見ている人達へのインタビューを流していた時、建物を見ていた一人のコメンテーターが「聞いたか？ポップポップと云う音を」と云った。その時、建物の窓ガラスが吹き飛ぶのが見えました。それから、建物が崩壊し始めたのです。外側に吹き飛ばされた窓ガラスは、下から上に向かって見えました。上から下ではなかったのです。私はそれを見たし、音も聞きました。そして、これは爆発だと思ったのです。後で同じ場面がテレビに放映されましたが、音は消されていました。

2-3 . WTC には爆発物が仕掛けられていた！（爆発物専門家の証言）

〔以下の出所原文は、<http://emperors-clothes.com/news/albu.htm>〕

9・11 事件 3 日後の 9 月 14 日、ニューメキシコの爆発物専門家が、テレビ放送された WTC 崩壊の映像を見て、二つの高層ビルは爆発物によって崩壊したとの見解を示した。

WTC の崩壊は航空機突入の結果としては整然としすぎていると、ニューメキシコ鉱山技術研究所のヴァン・ロメロ副所長は語った。「私の意見は、航空機が WTC に衝突した後のビデオテープを見てのものだが、建物の中に何らかの爆破装置があり、それが建物の崩壊を引き起したものと考える」と云うのである。彼は、エネルギー物質研究試験センターの前部長であり、そこでは建物、航空機、その他の構造物に対する爆発物の効果を研究している。彼の見解では、「航空機から発生した何かがあのような崩壊を始動させるとは考えにくい」として、WTC 崩壊の仕方が古い建物の取り壊しに用いられる制御式内部爆破手法に酷似していると述べている。

〔以下の出所原文は、<http://serendipity.magnet.ch/wot/mcmichael.htm> (I Tried To Be Patriotic)〕

WTC 崩壊の理由として、航空燃料による火災で鉄骨構造物が 800 ~ 900 まで加熱され溶解したと云う説がまことしやかに語られている。BBC など、この温度を繰り返して使っている。しかし、高層ビルに使われている鉄鋼の溶解温度は 1,538 であり、この高温をジェット燃料で作出す条件は WTC には存在しえない。酸素供給や強制給気が必要であるばかりか、突入機の燃料が満タンであったとしても、WTC 建物に使用されていた 20 万トンの鉄骨を溶解させるほどのものにはなりえない。

サウス・タワー崩壊時の写真(右下)では、突入部より上の 25 階相当部分(立方体のような形)が斜めに傾き、今にも倒れ落ちそうになっている。このままの状態が続けば、この部分全体が落下して WTC から多少とも離れた地点に激突したはずである。しかし、この部分は、何故か倒落直前に上空でこなごなになり下層部分と一緒に細かい瓦礫となって真下の敷地上に落下している。



2-4 . 航空機突入の直前に爆発が発生していた！

〔以下の出所原文は、<http://members.aol.com/senderberl/private/internal.htm> (Sender, Berl & Sons Inc Special Report, September 20, 2001) 〕

先ず、左の写真を見てもらいたい。飛行機がサウス・タワーに向かっているが、注意して見ると、飛行機が接近している高さでは建物から煙は発生していない。青空を背景に全ての煙は先に被害を受けたノース・タワーから上っているように見える。

次に、下の写真を見てもらいたい。これは9月12日のニューヨーク・ポスト紙第4面に掲載されたもので、航空機がサウス・タワーに激突する直前1秒以内の映像である。この写真では、同機突入前に、その突入階よりも数階下のあたりで既に煙が発生している。

しかし、航空機の突入前にサウス・タワーから煙が吹き出すことは考えられない。あるとすれば、左の写真を撮った時点と下の写真を撮った時点との間（即ち航空機突入の直前）に何者かがサウス・タワー内部で爆発物を爆発させたとしか考えられない。

2-5 . 第一撃の航空機突入以前にW T C から煙が出ていた！

ニューヨーク市在住の芸術家、荒川修作さんの証言〔以下は『中日新聞』（2001年9月14日）の記事〕名古屋瑞穂区出身でニューヨーク在住の芸術家、荒川修作さん(65)が、世界貿易センタービルに飛行機が突入するのを目撃していた。13日の夜(日本時間)、荒川さんは本紙の電話取材に対し、激突の様子や食料が調達できるようになった現在のマンハッタンの状況などを生々しく語った。

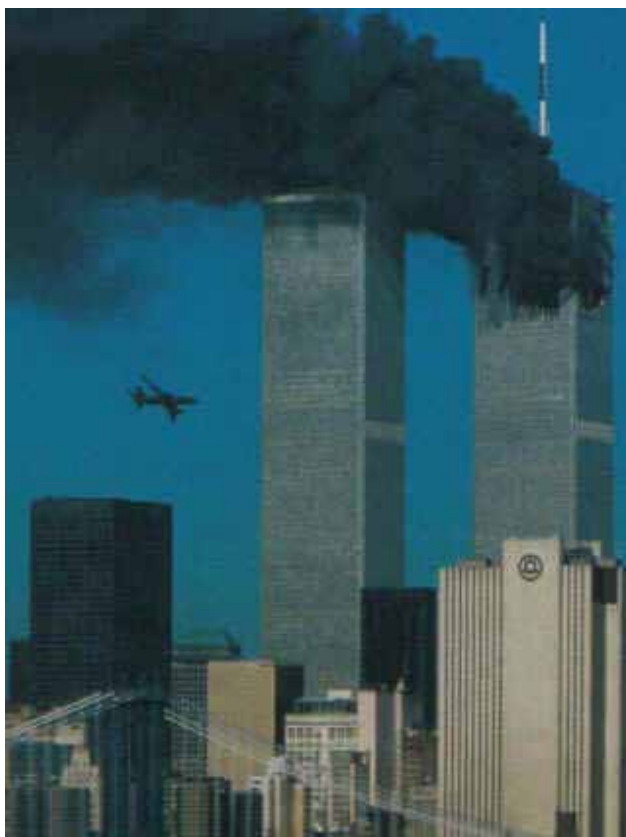
同センタービルから約1.5キロ離れて住む荒川さんは当時、住んでいるビルの下からの「火事だ」という声でセンタービルを見上げた。「今、冷静になって考えてみると不思議だが」と断った上で、飛行機がぶつかる直前にセンタービルからはすでに煙が出ていたように見えたといい、一機目、二機目が相次いで突入するのを目撃。そのまま7時間、現場から目が離せなかったという。

2-6 . W T C 崩壊後の鉄骨残骸が不審者等によって運び出されて行方不明になっている？！

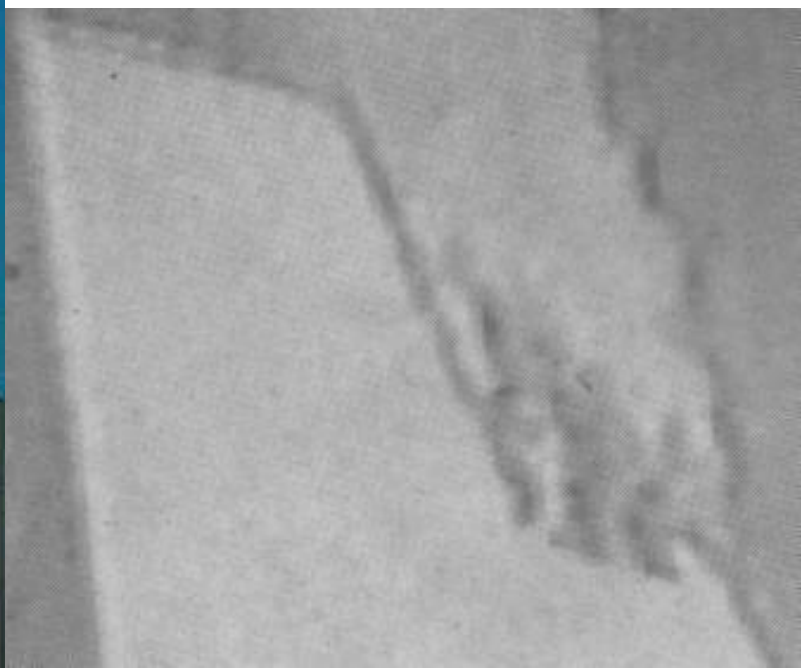
〔以下の出所原文は、http://www.geocities.com/knoxvillegreenparty/new_york_terrorism/mafia_bodysnatchers_steal_scrap_metal.html (MAFIA BODY SNATCHERS STEAL CRAP METAL BOOTY) 〕

W T C 崩壊現場の鉄骨残骸を事件直後から勝手にどんどん運び出している正体不明のグループが複数いて、かなりの量が闇に消えてしまったと云われる。本来はマンハッタン近くのスタテン島にある埋立地に運びこんで、当局が捜査のための選別することになっていたそうだが・・・？

2-7 . 米国消防界もW T C 崩壊の原因究明を求めて動き出した！



〔以下の出所は、http://fe.pennnet.com/Articles/Article_Display.cfm?Section=OnlineArticles&SubSection=Display&PUBLICATION_ID=25&ARTICLE_ID=130026 (WTC "INVESTIGATION"?: A CALL TO ACTION) 〕



当局がWTC崩壊の原因究明を放置して事故現場の残骸をどんどん解体処分しているのに対して、米国消防界の人たちが反発している。専門誌 Fire Engineering Magazine の編集長ビル・マニングは、火災によるWTC崩壊のメカニズムが理解できないし、耐火対策がなされた鉄骨の溶解原因を説明すべきだと主張して、第三者による独立調査機関の設置を求めて運動を始めている。

3 . ペンタゴンは地上で爆破された？！

3-1. ペンタゴン現場の公開写真には旅客機の残骸が見られない！



これがジャンボ旅客機の残骸なのか?! 国防総省が B 757 の残骸だと云う写真が 1 枚あるが、航空機の一部と認められるものは何も写っていない。

こんなハッキリしない「残骸」写真しか出てこないのは何故か？

ジャンボ旅客機なら、機体の残骸だけでも 100 トン前後あり、大量になるはずだが？

更に、飛行機事故なら残っているはずのエンジンや主翼部分の残骸なども全く見当たらない。

当局が突入機の破片だと称するもので、唯一それらしく見えるものは、左下の写真 1 枚だけである。



左の写真の手前に見えるのが、当局が 77 便機の「残骸」と称する物体。ペンタゴンからかなり遠い地点にある。

右は、同じ「残骸」を別地点から撮影した写真。ペンタゴンの建物がすぐ近くに見え、燃えている車も写っている。



「残骸」が自動的に移動するわけがないから、誰かが移動したのだろう。と云うことは、どこからか、このような「残骸」を引っ張ってきて現場に置いたとも考えられる。



左の写真が、ペンタゴンに突入したと云われる 77 便機と同型のアメリカン航空の B 757 型機。

上の写真の「残骸」は、この旅客機の中のどの部分に相当するのか？

「残骸」には、赤と白の塗装がしてある。機体で赤と白だけの塗装がされているのは、American のロゴの部分だけと思われる。

問題の「残骸」の拡大写真(左下)を見ると、同型機の拡大写真(右下)に見えるような赤文字の周囲に白の縁取りがある部分のようである。この文字の大きさから推測すると、「残骸」の大きさは横幅 1 メートル以内で簡単に移動できると考えられる。



そうすると、過去のアメリカン航空の事故機の破片を持ち込むことも可能であったろう。インターネット上の AirDisaster.Com の記録では、アメリカン航空の最近の墜落事故としては 1999 年 6 月 1 日に米国アーカンソー州で墜落した MD-82 型機があった〔http://www.airdisaster.com/cgi_bin/view_details.cgi?date=06011999&airline=American+Airlinesを見よ〕。そこでは、同機残骸を示す写真は全部で 9 枚掲載されており、その中に、左翼側の American のロゴ塗装部分がえぐれて吹き飛んでいるものが 1 枚（下の写真）ある。ペンタゴンの現場写真に写っている破片は、ここから持ち出されたものであるとも考えられる。



<http://www.airdisaster.com/photos/aa1420/6.shtml>

3-2. 旅客機の墜落事故現場はどうなっているか?

下に示した日本航空 (JAL) 旅客機の墜落現場の写真からも明らかなように、墜落すれば、機体はばらばらになる。しかし、何もかもこなごなの破片になるわけではない。墜落現場には、機体の残骸破片が広範囲に散乱しているが、主翼や車輪などは識別できる形で残っており、遺体なども無残な形ではあれ残っている場合が多い。ペンタゴンの場合に限って、何故こうならなかったのか？ 本当は、云われている旅客機が落ちなかったからではないのか?!



3 - 3 . ペンタゴン攻撃の謎

〔以下（抄訳）の出所原文は、<http://www.reseauvoltaire.net/actu/conflit3.htm> (Reseau Voltaire, 8 octobre 2001, *Les mystères de l'attentat contre le Pentagone*) 〕



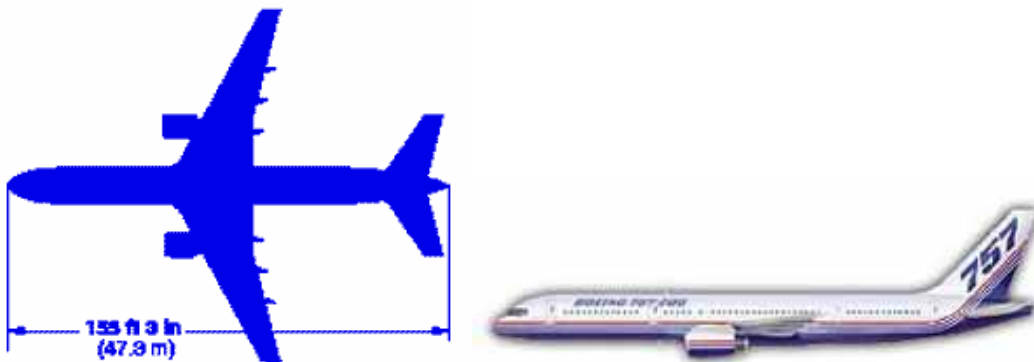
9月11日のペンタゴン攻撃に関する公式の説明には重大な疑問がある。航空機の大きさや最低飛行速度から考えて、なぜ被害がこれほどまでに小さいのか、理解に苦しむからだ。建物は、深部までやられておらず、機体の鼻先だけが突っ込んだかのようにになっている。だとすれば、ボーイング機の残骸が写っている写真がただの一枚もないのは、どういうことだろうか？ 軍当局は、付随的な何らかの出来事を語らずに隠しているのか、それとも事実そのものに歪曲があるのか？

世界貿易センターへの攻撃については、資料や証言も色々あって、事実を正確に疑う余地なく理解できる。しかし、ペンタゴンの攻撃については全くそうではない。

当時、テレビ局もフリーの写真家も、誰一人として事件直後の現場撮影を許可されなかった。利用できる写真の出所はすべて軍関係で、厳しい検閲を経たものばかりだ。こうした報道管制や検閲は、当初、弱い態勢を示すようなイメージを流布させたくないと言うアメリカ軍部の考え方によるものだとされていた。しかし、利用できる写真を研究すると、公式の説明も崩れ、軍は真実をありのままに語りたくなかったのだと云うことが分かってきた。

アメリカン航空 77 便機は、追尾してきた F-16 数機を振り切り対空防衛を破って、2001 年 9 月 11 日 9 時 37 分 (国防総省当局による)ないしは同 38 分(北米空域防衛司令部による)にペンタゴンに激突したことになる。これによって火災が起こり、建物内部で爆発が 2 回あったと云う。その結果(乗客乗員のほかに)125 人が死亡した。

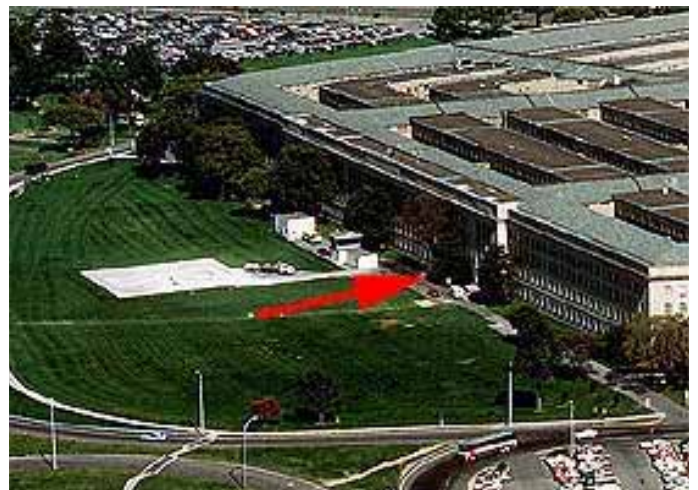
航空機は、ボーイング 757-200 型で、長さ 47.32m、高さ 13.6m、幅 38m。客室は、直径 3.5m ある。ペンタゴンは、行政機関の建物としては世界最大である。1941 年に建造され、5 重の同心円状に重なった部分からなっていて、その一つ一つが五角形をしている。それぞれが 5 層の建物で、10 の渡り廊下で連結されている。周囲は、各辺 282m で、高さが 24m ある。



突入機は、自動車専用道路の上を横切ってペンタゴンのヘリポート近くに着地し、そのまま前進して建物最外周部の 1 階に突っ込んだと云われている。機が道路付近に並んでいる照明灯を飛び越えてから突入した建物までの距離は、わずか 125m しかない。



© Space Imaging



© U.S. Department of Defense



© U.S. Department of Defense



破壊されたのは、最外周の建物だけである。衛星写真で明らかなように、突入機は第2周目の建物を損傷していない。事件の後、何日か経って重機で建物の破損部分を取り除き瓦礫の撤去を始めた後で撮影された写真からも、そのことが確かめられる。ボーイング機の重量は100 t近い。着地前の速度は最低でも時速400 kmである。それでも、これ程度しか破壊されていないのは、要するに、機体の鼻先だけがペンタゴンの最外周建物に突入したのだと云うのである。そうすると、操縦席や主翼は建物の外部に残ったことになる。主翼には燃料タンクがあり、火を噴いたはずだ。ケロゼンは、燃え上がる性質があり爆発性のものではない。



建物は一階を撃破された。機体は建物正面の一階部分に穴を開けたと云われる。初動消火救援の際の写真を見ると、激突した場所は煙と放水に覆われているが、建物の上部は損傷していないことが分かる。



© U.S. Marine Corps photo by Cpl. Jason Ingersoll



© U.S. Marine Corps photo by Cpl. Jason Ingersoll

一階以上の階層部は、事件発生後の 30 分あまり後の 10 時 10 分頃に崩落した。



© U.S. Department of Defense, Sgt. Rudisill



© U.S. Army

発生した火災は短時間で鎮火した。最外周の建物内部で火災が起こり 2 本の回廊に延焼したが、間もなく消火された。ラムズフェルド国防長官がペンタゴンを出る時の写真を見ると、火災はヘリポートの管制塔のところまでしか広がっていない。125 人の犠牲者が出たのはこの火災によると云われる。ペンタゴンでは、日常 23,000 人が勤務している。



© U.S. Army



© Space Imaging

治安上の理由で、報道も救援隊も接近を阻止された。国防省広報部によると、事件直後に第二の神風攻撃があるとして、救援隊は離れた場所で装備を広げるように要請された。報道陣は、救援の邪魔になると言う理由で、更に遠くに留め置かれた。

3-4 . ペンタゴンに突っ込んだボーイング機はどこだ？！

〔以下の出所原文は http://www.asile.org/citoyens/numero13/pentagone/erreurs_en.htm (Pentagon, *Hunt the Boeing! And test your perceptions!*)〕

誰もが知っているように、9月11日に世界貿易センターが攻撃された後1時間以内に航空機がペンタゴンに衝突した。最初は、AP電が爆薬を仕掛けたトラックによる爆発であると報じた。ペンタゴンは直ぐにこれを否定した。事件についての米国政府の公式見解は未だに変わっていない。そこで、一つ皆さんに一寸したゲームを紹介したい。まず、以下に並べた写真を見て下さい。その後で、事件が公式発表通りかどうか、写真の中から確証を見つけて下さい。ボーイング機を探し出せば、お楽しみです！

問題（1）



Image : [Space Imaging](#)



Image : [U.S. Department of Defense](#)

左上の衛星写真は、ボーイング機によって激突された建物部分を示している。

左下の写真では、破壊された最外周部分とその奥の第2周部分が見えている。

これらの写真から、航空機が建物の最外周部分だけを破壊したことは明らかで、他の4つ内周部分は無傷であり、それらに被害があるとすれば、当初の爆発による火災によるものと考えられる。

ボーイング 757-200 型機は、重量が 100 トン近くあり、最低時速 400 km* で飛行するので、これが激突してペンタゴンの外周部分だけを破壊したことは、一体どう説明すればよいのだろうか？

* 正確には、着陸時は時速 400 km で、通常の飛行中は時速 960 km である。

問題（2）

下の写真2枚は、激突直後の建物周辺の様子を示すものである。航空機は建物の一階部分に突入したと見られる。上部の4階層は、午前10時10分近くになって崩落した。建物の高さは23.76mである。他方、ボーイング機の高さは13.62m、胴体全長が47.25m、主翼全長が38.02m、コックピットの高さが3.47mある。この機体がどのようにして建物の1階部分だけに激突したのか、あなたは説明できますか？



問題（3）



Image : [U.S. Army](#)

上の写真は、破壊された建物の前の芝生の状態を示すものである。航空機はペンタゴンの外側第1周目の建物の1階部分だけに突入したことを念頭において、あなたは、この写真の中でボーイング757-200型機の残骸を何か見つけ出すことができますか？

問題（4）



左の写真では、トラックがペンタゴンの芝生の上に土砂を落している。その背後でブルドーザーが芝土の上に砂利を敷きつめているのが見える。そもそも何の損傷も受けていなかった芝生の上に、国防長官は何故土砂を敷きつめる必要があると考えたのか、あなたは説明できますか？

問題（5）



Image : [Space Imaging](#)



Image : [U.S. Department of Defense, Sgt. Rudisill](#)

これらの写真は、ボーイング 757-200 型機の大きさを示すだけの映像を建物の激突部分と云われる位置に重ね合わせたものである。

航空機の主翼は一体どうなったのか、そして何故それは建物を破壊することにならなかったのか、あなたは説明できますか？

問題（ 6 ）

一人の記者が質問した・・・「現場には飛行機の何かが残っているのですか？」

「先ず飛行機についてのご質問ですが、只今お話ししている消火活動中に、幾つかの小さな飛行機の破片が建物内部から見えていましたが、大きなはありませんでした。つまり、胴体部分とか、そのような類のものはありませんでした。」「それに、何と云うか、そうしたことについては、私が答えないほうがいいですよ。飛行機が近づいてきて実際に何が起きたかは、非常に多くの目撃者がいて、あなたにもっといい情報を提供できるでしょうから・・・。それに、私達は知らないんです。私自身も知らないですよ。」

別の記者が質問した・・・「ジェット燃料はどこにありますか？」

「私達が液体のひとつたまりだと思ふものが丁度そのあたりにありました・・・つまり、飛行機の鼻先だと思われるあたりに・・・。」

上の問答は、事件翌日の 9 月 12 日に国防次官ヴィクトリア・クラークがペンタゴンで開いた記者会見の場で、アーリントン地区の消防局長エド・プラウアーが応答したやり取りである。消火に駆けつけた地元の消防局長が、問題の飛行機がどこに落ちていたのかについて、何故、記者たちに何も話せなかったのか、あなたは説明できますか？

問題（ 7 ）





Images : U.S. Marine Corps photo by Cpl. Jason Ingersoll 1 et 2

上の写真2枚は、事件直後に撮ったもので、ボーイング機が突入したとされるペンタゴン最外周部の状態を写し出している。この写真で、あなたには、どこがボーイング機の直接激突した個所が分かりますか？

さて、以上の謎解きは如何でしたか？ ボーイング機は見つかりましたか？ あなたは、これでもまだ、事件の公式説明を弁護できますか？

きっと、あなたは、政府の公式説明に何か肝心なことが欠けているのに気づいたと思います。もし、ボーイング機が本当にペンタゴンに突入したのかどうか疑い始めたのであれば、消えてしまった該当機が一体どうなったのかを詮索することになるでしょう。そうすると、あなたは、先ず何よりも、米国政府が何故この事件の顛末をそのような内容で発表したのか思案することになるでしょう。更に、これに関連して他にも色々と疑問が湧いてくるはずです。だからと云って、心配することはありません。そのように物事を探究することは、人間として全く正常なことですから！

4. 敵はすぐ近くにいます！

〔以下の出所原文は <http://www.davidicke.net/newsroom/america/usa/091601c.html> (The enemy is very much within.)〕

【これは、9・11事件の二日後の2001年9月13日に、或る報道関係者(TOP_VIEW)と米国空軍予備役諜報部員(Intel Source)との電話のやりとりを報じたものである。この諜報部員は、9・11事件の背後にブッシュ政権の存在を指摘している】

TOP_VIEW は、今夜、短時間ではあるが極めて重要な電話インタビューを終えたところである。この対話は、我々とは旧知の間柄で全面的に信頼できる仲介者によって設定されたもので、相手は空軍予備役の諜報部員である。〔中略〕そこで単刀直入に伝えられた内容は、全体として、この国と世界中の人々すべてにとって極めて重大な事柄である。【以下は、この電話インタビューの内容】

TOP_VIEW : 火曜日に出来事について、あなたが何を伝えなくてはならないのか、聞かせて下さい。まず最初に、今回の事件について、あなたは、目下一般の人々がマスコミや政府によって伝えられていることよりはるかに多くのことを知っていると思っています。

Intel Source : その通りです。

TOP_VIEW： では、その情報を我々に伝えてくれますか？

Intel Source： まあ、場合によりけりです。少しぐらいなら、何とか。これは、出版するつもりですか？

TOP_VIEW： インターネット上でと考えています。

Intel Source： 私自身と***（仲介者）が特定されるようなことは一切公表しないことが大前提です。

TOP_VIEW： そのことは、我々もよく承知しています。完全にです。全くその通りにしますよ…。

Intel Source： あなたは、***を以前から知っているのですか？

TOP_VIEW： 6年ぐらいですかね。

Intel Source： そうですか、彼があなた方を保証するんですね？（含み笑い）それじゃ…。

TOP_VIEW： では…、ある連邦政府部門は火曜日の事件を事前に知っていたってことが、ますますはっきりしてきていますが、あなたも、そう思いますか？

Intel Source：（聞き取り不能）

TOP_VIEW： ちょっと失礼！いま何と云ったのか分かりませんでした…。

Intel Source： 気にしないで下さい。

TOP_VIEW： 政府は何が起こるか知っていたというのは、本当ですか？

Intel Source： そう云っても、いいんじゃないですか。事実、政府の内部に、あのヤラセを全部仕切った…連中[複数グループ]がいるんですから。

TOP_VIEW： 政府機関の者たちと犯人らが協力して一緒にやったとでも云うのですか？

Intel Source： いいえ、[連邦政府内部の]あのグループ[複数]の連中は、どこから見ても、事件の犯人そのものだと云ってるんですよ。

TOP_VIEW： それは、信じられないようなショッキングな話です…あなたの云っていることは。連邦政府内部の連中が、火曜日のテロリスト攻撃と云われている事件の本当の主役だと云うんですね？

Intel Source： そう云うことです、間違いなく。

TOP_VIEW： おやおや、何とも恐ろしいことを知ってしまったものですね！あなた自身は、そのことをどんな風を感じているのですか？それに、一体あなたは何故こんな話を我々に伝えようとするのですか？自分の云っていることに確信があるのですか？

Intel Source：（笑いながら）さあ、何から先に答えたらいいんですかね？私は、事実であると確信もしないで、このような話を人様にするには決してありません。私自身どう感じているかと云うと、まさしく吐き気をもよおしてますよ。不快きわまりない、あんなことは全く許せない、完全に反対です。でも、あれは本当ですから、我々は皆で対抗しなきゃいけない。我々の社会構造を一番基本的なレベルで変えてしまおうと凝り固まった勢力が、政府の中にあるんですから。だから（この社会が根本から変わるような）動きが確実に起こるようになるために、あの連中は、あんなことをやっているんですよ。

TOP_VIEW： 事件については、軍部の中では現在どんな状況ですか？軍の上層部は、このことを知っているのですか？もし、そうだとしたら、彼等の立場はどんなものですか？

Intel Source：（聞き取り不能）

TOP_VIEW： 今、何と云いましたか？

Intel Source： 知っている者も、知らない者もいます。中には、多くの国民の皆さんと同じで、なかなか信じようとしません。目下、軍の上層部では、真相に気づいた者たちの間で色々と抗争が始まっていることは間違いありません。

TOP_VIEW： あなた自身はどうですか？

Intel Source： 私自身は、合衆国憲法を強く信奉する愛国的アメリカ人だと思ってます。…憲法の原則を支持し守るために、自分がすることは何でもやるつもりですし、他の大勢の人たちも、そうするだろうと思います。

TOP_VIEW： そう、その点が私も知りたかったところです。あんな大規模に残虐行為をやって、どうやらその狙いは、国民生活の自由を大幅に制限しようとして、「テロリストの」攻撃から我々を保護するとの名目で国を骨抜きにすることのようですね。ドイツで、ヒトラーが国会議事堂を炎上させた事件に似てますよ。

Intel Source： その通りです。(聞き取り不能)・・・が、火曜日に事を起こした主な理由の一つでしょう。そのほかに、中東油田の支配やそれに関連した問題の処理もあったのです。

TOP_VIEW： そこでですね、あなたのような人たちは、そのような勢力に何とか対抗する用意があって、そうする能力もあるのですか？

Intel Source： 自分自身では、やれることは沢山あると思っているし、又そうするつもりです。あなたに今こうして話しているのも、その中の一つですよ。それに、私のような者は、ほかにも大勢います。

TOP_VIEW： それでは、ペンタゴンが攻撃されたことは、全体的にどう観ればいいんですか？

Intel Source： そのことは、今の私には何とも云えません。

TOP_VIEW： いつか又、話してくれますか？

Intel Source： 多分・・・。もう、そろそろ、こころで話を止めなきゃいかんようです。

TOP_VIEW： ほかに何か、この際、特に云っておきたいことはありませんか？ 忠告でも何でも・・・。

Intel Source： 我々の生き方が歴史的にも最大の脅威に直面していると云いたい。・・・敵は、すぐそばにいるのですよ。すぐ、そばです！

TOP_VIEW： 要するに、火曜日の事件は、内部犯行と云うことですか？

Intel Source： 全く、その通りです。実行現場の連中から、大抵の皆さんが想像もできないような上層部に至るまで、みんなですよ。さっき話したように、現在、政府内部では大変激しい抗争が起きていますよ。

TOP_VIEW： その抗争には、私たち皆が巻き込まれるのですね。

Intel Source： その通りです。

TOP_VIEW： ブッシュ政権が事件に絡んでいることが、私にも非常にはっきりしてきたと思います。これで間違いはないのですね？ 彼等は、明らかに、あなたが云ったような根本的な社会改造をやりようとしているのですね。

Intel Source： そう思って間違いはないでしょう。では、もうこの辺で終わりにしましょう。

TOP_VIEW： では、お休みなさい。色々とお話してくれて、大変有難う。

以上で、愛国的な空軍諜報部員との短いが非常に有意義なインタビューは終わりです。皆さん、我々は大変な話を聞きました。目下、アメリカ人は、歴史上最大の危険な闘争に巻き込まれています。敵は、狡猾で、悪意があり、実に悪魔のような勢力で、我が連邦政府のあらゆる組織に深く入り込んでいます。その勢力は、我々のマスコミや各種報道機関、芸能界、学校や職場、その他我々の社会と日常生活の多くの分野に浸透しています。先程の人の云うように、「敵はすぐそばにいる」のです。

以上

だるま

2002年6月20日

炭疽病か？ F B Iがあくびしている。

『ニューヨーク・タイムズ』2002年7月2日、ニコラス・D・クリストフ執筆評論

9・11事件以前のF B Iのへまは、今更とやかく云っても仕方がない。しかし、彼等が炭疽菌事件の殺人犯捜査では全くやる気を見せず不条理な行動をとっていることは、犯人に犯行をくりかえさせるかイランや北朝鮮への逃亡を許すことになり、アメリカの国家的安全を脅かし続けている。

F B Iの炭疽菌事件捜査に係わった者は、殆ど例外なく、彼等のやる気のなさに大変驚いている。生物兵器部門の人たちの中には、何人かが事件の犯人らしき者を知っていると思っている。ここでは、この容疑者を仮にZ氏としておこう。F B Iは、このZ氏をウソ発見器にかけ、家宅捜索を2回やり、事情聴取も4回行ったことになっているが、未だに彼を監視下においているわけでもなく、また彼の筆跡鑑定をして炭疽菌を混入した郵便物の字体と比較分析するような捜査もしていない。

こうしたことは、F B I当局のもっと大きな取り組み方の一部でしかない。驚くべきことに、F B Iは、アイオワ州立大学で保存してあった炭疽菌の廃棄を許し、事件に使われた炭疽菌の生成過程が解る貴重な手掛かりをつぶしてしまっている。更に、F B Iは、発見された未開封の炭疽菌入り郵便物を12月まで放置していた。また、F B Iは、今年3月になるまで、犯行に使われた炭疽菌を比較分析して特定するために関係機関から炭疽菌株を取り寄せることもしておらず、又その分析検査も未だに完了していない。そして、1ヶ月前までは、メリーランド州フォート・デトリックとユタ州ダッグウェイ性能試験場にある2ヶ所の関係機関の研究者たちに対する系統的な捜査も行っていない。

献身的に職務に励んでいる捜査官たちの慎重な行動に対して、素人の部外者がとやかく云い立てるのはけしからんことかも知れない。しかし、事件発生後何ヶ月も経つと云うのに、F B Iは、官僚体制よろしく、のろのろした動作で遅々とした捜査を続けているのは、どうしたことか。事件直後の昨年10月には、既に生物兵器関係分野の人々が容疑者としてZ氏の名前をF B I当局に伝えていたはずだ。また、私自身も、簡単ではあるが、この5月24日の紙面コラム欄に彼のことを書いている。

問題の当人は犯行を否認しているし、また、彼の友人たちは、かれらが愛国者と見なしてきた者に嫌疑がかけられていることで思い悩んでいるようだ。私の聞くところでは、当人はウソ発見器にかけられて何度か回避反応を示しているそうだが、これは彼の気質によるものかも知れない。

もっとも、Z氏がアラブ人であったならば、彼はずっと以前に逮捕拘禁されていたであろう。ところが、彼は、米国国防総省、C I A、生物兵器部門などと密接なつながりのある忠実なアメリカ人である。因みに、彼は、かつてフォート・デトリックの細菌危険地域で周りがほやほやの細菌だけと云う「ホット・スウィート」〔訳注 防菌壁で囲まれた部屋〕でガールフレンドと一緒にいるところを目撃されている。

何れにしても、Z氏については多くの専門家たちが背後でかしましく噂しているのであるから、F B Iは、もうそろそろ動き出してもよい時期ではないだろうか。もっと積極的に彼を追及するとか、彼の過去を徹底的に洗い直して見落しがないか再点検してみるとか、或いは彼の無実を証明し嫌疑をはらしてやるとか、何かはつきりするべきである。

炭疽菌を送りつけた犯人が誰であっても、恐らく人を殺す意図はなかったかも知れない。当の郵便物中の文書では、受取人に抗生物質をとるようにと警告している。私の推測では、犯人の狙いは将来生物兵器による攻撃があった場合に備えるように注意を喚起することであったとも考えられる。

そこで、F B Iに対しては、この際、以下のような若干の質問を試みるのが公平であろうかと思う。

Z氏がどれだけの異なる氏名・身分と旅券を所有しているか知っているか。そして、[どのように海外に出て、どこで何をしているか]彼の海外旅行を監視してきたのか。私は、少なくとも一つ、彼の偽名を知っているし、更に彼が未だに継続的に外国へ公務出張で出かけており、中央アジアにさえ行っていることも分かっている。

炭疽菌事件が始まる1ヶ月たらず前の昨年8月に、何故、彼の国家最高機密事項取扱許可の身分が停止されたのか。この動きは彼を激怒させたようだが、CIAと軍部情報機関等はFBIの事件捜査に全面的に協力しているのか。

FBIは、彼が昨年秋まで出入りしていた隠れ家も捜索したのか。FBI当局は、この建物のことを知っていたし、またZ氏がそこを訪れた人たちにCipro[訳注 Ciprofloxacin Hydrochloride と云う細菌感染の治療に使われる抗生物質で、米国では体内に吸入された炭疽菌に対する使用が許可されている]を与えていたことも知っている。この建物やその他多くの彼が使用していた施設は、Z氏の友人名義で登記されているが、恐らく実際はアメリカの情報機関が管理運営している隠れ家であろう。

これまで人間に発生した炭疽病としては最大規模のものとされている1978-80年にジンバブエで起きた一万人をこえる黒人農民を発病させた事件にZ氏が係わっていたのかどうか、FBIは調査しているのか。当時黒人ゲリラと戦っていた白人ローデシア軍が炭疽菌を使ったと云う証拠が上っており、Z氏は、自分がその白人部隊の中でも非常に恐れられていたセルース隊[Selous Scouts]に加っていたと云っている。アメリカ軍部の無法行動隊(複数)[訳注 原文表現は"rogue elements of the American military"]が、このローデシア軍を支援して黒人たちに対する炭疽菌やコレラ菌での攻撃を可能にしたのではないのか。更に、Z氏の経歴は、彼が旧南アフリカ軍にも係わっていたことを示している。彼の他の経歴は全て棚上げするとしても、米国国防総省が、世界でも最も致命的な細菌類を取り扱う自国の生物兵器部門に、こうした二つの人種差別主義白人政権の軍隊に服役していた経歴の人物を採用することなど、誰が知っていたらうか。

さあ、どうだ？ あなた方FBIは、何時になれば本格的に動き出すつもりなのか？

[以下の原文出所はThe New York Times: <http://www.nytimes.com/ref/opinion/KRISTOF-BIO.html>
(Columnist Biography: Nicholas Kristof)]

評論執筆者ニコラス・クリストフの人物紹介



ニコラス・D・クリストフは、2001年にニューヨーク・タイムズ紙の評論執筆者としての特別の地位に任命された。彼は、2002年末まで、テロ攻撃の影響に関連した諸問題について論評することになっている。彼の評論記事は、各週火曜日と金曜日に掲載される。

この評論執筆者になる以前は、彼はニューヨーク・タイムズ紙の日曜版担当の編集次長であった。クリストフは、1984年にニューヨーク・タイムズに入社し、経済担当の記者をした後、ビジネス担当の特派員としてロス・アンジェルスに駐在し、更に香港支局長、北京支局長、東京支局長を歴任した。彼は、2000年には、大統領選挙戦を取材し、特にジョージ・W・ブッシュ知事を追跡取材した。

1990年には、クリストフと妻のシェリル・ウーダン[Sheryl WuDunn]は、共同で、中国の「天安門広場」民主化運動を取材した報道でピューリッツァー賞を受賞した。彼等は、ジャーナリズムでピューリッツァー賞を受けた唯一の夫婦であり、他にも、外国報道に対するジョージ・ポーク賞や国際的報道に対する海外記者クラブ賞などを含む様々なジャーナリズム表彰を受けている。

クリストフは、1959年4月27日生れで、オレゴン州ヤムヒルの近くのさくらんぼ農場[訳注 彼の両親ら家族は現在もオレゴンで農場経営をしている]で成長した。その後、ハーヴァード大学に入学して、1981年にファイ・ベータ・カッパ優等生として卒業し、ローズ奨学生としてオックスフォード大学に留学して法律を専攻し最優秀賞を受けた。更にその後、彼はカイロのアメリカン大学でアラビア語を専攻して学位を取得している。

クリストフと妻のウーダンは、『中国は目覚める 勃興する力の魂を求める闘争』(1994年出版)と『東からの雷鳴 立ち上がるアジアの肖像』(2000年出版)の著者であり、3人の子の親でもある。

以上

【訳者解説】

以上に訳出したクリストフの評論記事は、目下二つの点で世界中の有識者から特別の関心を呼んでいる極めて異常な記事である。

まず、ニューヨーク・タイムズと云うアメリカを代表し世界中の有識者に読まれる数少ない高級紙(global quality paper と云ってもよい)に、読者の注目を引く Op-Ed (社説の対面頁に同格で掲載される署名評論記事)として出されたこと。次に、その執筆者がニコラス・D・クリストフと云うタイムズ社でも超一流のエリート記者であること。従って、その異常な内容が、信憑性をもって世界中を駆けめぐり深刻重大な反響を呼ぶことになる。

勿論、これでブッシュ政権に対する諸々の疑惑はいやが上にも高まり、現アメリカ政府の内外政策に対する影響は計り知れない。早速、この評論記事が出た3日後(7月5日)のニューヨーク・タイムズ紙には、トップ記事でペンタゴンのイラク侵攻作戦計画書の内容が報じられた。これは、ペンタゴン作戦計画担当部門の内部から漏らされたもので、これまでブッシュ大統領自らが国民に言明してきた対イラク戦の段取りを否定するものである。

明らかに、アメリカ帝国の支配階級の中で現政権の内外政策をめぐって深刻な利害対立が進行している。帝国の統治権をめぐって前クリントン政権の後半期に露骨に展開された権力抗争が一昨年末の大統領選で一旦決着をつけたかに見えたが、昨年の9・11事件以来、陰險な謀略と粗野な扇動で近欲排他的な内外政策を強引に遂行しようとする現ブッシュ政権に対して、いよいよ堪りかねた旧勢力が新たな挑戦を試みることになったのであろうか。

さしずめ、表面上は、今秋の連邦議員中間選挙に向かって国内各方面での激しい政治闘争になるが、水面下では、これまで同様に謀略の限りを尽くした凄惨な権力抗争が進展するであろう。

クリストフの評論記事は、掛け値なしにアメリカ新聞史上最も世間を驚愕させた記事の一つであり、ブッシュ政権に対する宣戦布告とも解される。彼の論法は、中国流に云えば「指桑罵槐」で、F B Iを名指しながら突きつけた疑問はその所轄権限をはるかに超えたもので、明らかに背後にいるブッシュ政権に向けられている。しかも、炭疽菌郵送殺人事件(以下は炭疽菌事件)と云う9・11事件の延長線上に起った出来事を国家機関としてのペンタゴンやC I A内部の謀略機関の仕業と見立てての極めて具体的な追及であるから、事の真相についての読者の推測が、背景にある9・11事件にまで及ぶことは避けられない。

クリストフの書き出しは穏やかではある。今春来、米国内で高まっている9・11事件の責任追及には乗らず、この大事件の蔭に隠されたかの観がある炭疽菌事件に対するF B I捜査の遅延を指摘しつつ、次々と具体的な疑問を提起して次第に犯人像を絞り込み、遂には背後関係としての特定国家機関の係わりまで指摘して事件の真相に迫っている。

そこでは、善良温厚なアメリカ国民がびっくり仰天するような、国家機関の隠された事実が幾つか曝け出されている。とりわけ、アメリカ軍部には、目的の為には手段を選ばない、直属上官の命令次第で冷酷非情に何事でも実行する、ならず者のような特殊部隊があり、そのような隠密部隊の要員らが、かつてアフリカ大陸に居座った白人の人種差別政権(ローデシアと南アフリカ)を支援して、史上最悪と云われる細菌兵器を使つてのアフリカ黒人の大虐殺をやったこと。更に、昨年の米国内を震撼させた炭疽菌事件の背後には、このような米国国家機関の構成要員らの動きが見え隠れすること。しかも、肝心の所轄捜査機関F B Iは機能麻痺を装い遅々として動かないこと。このような諸々の不可解な事実をブッシュ政権はどう説明するのか、とクリストフは厳しく追及する。

そもそも、国家機関の隠密謀略組織の実動要員らは命令によって動く。目下のアメリカ帝国では、一体誰が彼等を掌握し、目標を定め、作戦を立て、指揮命令して実行させるのか。結局、そのような組織を全体として誰が動かし、それは誰の利害に叶うことになるのか。奇しくも、クリストフの評論記事は、今後の人類社会の命運を定める国際情勢の核心に迫る問題提起をしたことになる。

まず、クリストフの評論記事は、ワシントンの米国政府内部では炭疽菌入り郵便物の差出人が誰であったかは今や公然の秘密であることを明らかにしている。ブッシュ政権、議会、報道界の何百人もが、とくに、こうした情報を握っておりながら、それは、一般国民にはこれまで意図的に隠されてきた。F B Iは、事件捜査の進捗状況について発表を渋り、世論に迫られる度に、容疑者すら特定できておらず捜査

が進展していないとする主旨の公式声明を繰り返してきた。本来ならば、こうした不甲斐ない捜査当局を叱咤命令して真相解明に突き動かすべきはずの大統領以下現政権の要人らも、ひたすら沈黙を守り、専ら内外「テロリスト攻撃」の再発警告を繰り返して「テロ対策」の必要を訴えることに終始してきた。

クリストフによれば、炭疽菌事件の捜査が一向に進展しないのは、証拠不十分によるのではなく、主要容疑者を庇い保護する強力な背後関係があり、それが組織的に政権中枢につながっているからである。現に、この事件で5人も殺した犯罪容疑者のZ氏は、ブッシュ政権下で未だに現役であり、しかも「公務出張で」中央アジアにまで出かけていることなどは、彼が事実上天下御免の身分であることを示している。要するに、現アメリカ政府の首脳部 即ちブッシュ大統領、チェイニー副大統領、ラムズフェルド国防長官、アッシュクロフト司法長官、テネットCIA長官、ミューラーFBI長官らは、少なくとも、国家機関によって訓練された軍事・謀略組織の暗殺者たちを保護する犯罪的陰謀に係わっていると云うことになる。

クリストフが示唆するところは、捜査当局がZ氏を逮捕できないのは、彼が多くを知りすぎているからであり、また米国の軍事・諜報・謀略特務機関の庇護者たちがそれを許さないからである。彼の逮捕とその容疑追及は、必然的に、例の炭疽菌による計画的な自国民の殺害事件のみならず、世界中を震撼させた内外での数々の謀略犯罪事件に米国政府が関わっていることを暴露することになるからである。

炭疽菌テロリストらは、米国議会上院の院内総務トーマス・ダシュルと司法委員会委員長パトリック・リーヒーにそれぞれ最大致死量の炭疽菌を混入した書信を郵送することによって、民主党指導部の殺害と(それが不首尾であっても)脅迫を狙ったのである。これは、明らかに、その直前に起きた9・11事件の背後関係を知る者たちへの沈黙を強いる脅迫でもあった。

従って、昨年9月下旬から10月中旬にかけて起きた米国内での一連の炭疽菌郵送事件は、一義的には、政治的反対勢力の有力者たちを狙った暗殺未遂事件である。クリストフの評論記事が米国内のみならず世界中を驚愕させたのは、この謀略事件に現ブッシュ政権が、事前共犯とは云わないまでも、少なくとも事後共犯として深く関わっていることである。

これは、まさしく現ブッシュ政権に対する容赦なき告発であり、これがアメリカ合衆国を代表するニューヨーク・タイムズ紙に社説と並ぶ署名評論記事として出された事実をどのように理解すればよいのか。

有り体に云えば、ニューヨーク・タイムズ紙は、アメリカ支配階級の主要な統治手段の一つであり、長年にわたって知能エリートによる国民の意識形成と内外に対する情報操作を担ってきた。タイムズ紙は、こうした機能によって米国の既存国家体制の維持発展に重要な役割を果たしてきたのである。それが、本来支えるべき政権の根底を揺るがすような内部告発をするに至っては、同紙が従来主導してきたようなアメリカにおける「民主主義社会」の在り様が今や崩壊に瀕していることを意味するばかりか、実は、一般国民が全く関与できない国家権力体制の中核部で、鋭く利害対立する勢力間の激烈な抗争が進展していることを意味している。時まさに「山雨来たらんと欲して風楼に満つ」である。

以上

だるま

2002年7月6日記

【約者補足】

実は、Z氏の本名とかなり詳しい身元が6月下旬に地元の新聞を初め幾つかのメディアによって報道されている。彼の氏名は、スティーヴン・J・ハットフィル(Stephen J. Hatfill)で、長年米国陸軍特殊部隊員及びCIA謀略要員として細菌戦を専門にしてきた48歳の男である。

ハットフィルの経歴は、この種の人物を描いたハリウッド映画もどきの派手なもので、世界各地を股にかけて暗躍してきた。駆けだしの頃は、CIAなどによる細菌戦の訓練を受けた後、主として、白人の人種差別政権が最後の悪あがきをしていた旧ローデシア(現ジンバブウェ)や南アフリカで白人政権の特殊部隊に加わり現地の黒人解放戦線との戦闘を支援していた。特に、1975年から1978年にかけては、ハットフィルはノース・カロライナ州フォート・ブラッグを拠点にした米国陸軍軍事援助機関(U.S. Army Institute for Military Assistance)に所属してローデシア白人政権軍の特殊航空隊(略称SAS)と対ゲリラ特殊部隊セルウス隊(Selous Scouts)に勤務していたが、この時期には現地黒人地域で炭疽菌などによる感染症で多数の犠牲者が出たことは既にクリストフの記事に述べられている通りである。

その後も、ハットフィルは、ペンタゴンとCIAの秘密細菌戦や細菌兵器開発研究の要員として働き、最近では1997年から1999年にかけてメリーランド州フレデリックにある米国陸軍伝染病医学研究所(U.S. Army Medical Research Institute for Infectious Diseases)に勤務してエボラ菌の研究などに従事し、その後は今年3月まで米軍特殊部隊員・在外公館要員・緊急医務隊員・その他の政府職員への対細菌攻撃訓練に携わっていた。

なお、ハットフィルは、1991年以降、「湾岸戦争」後の国連の対イラク兵器査察特別委員会(UNSCOM)に米国政府派遣の査察工作隊員として加っている。当時もう一人のアメリカ人同僚隊員であったデイヴィド・フランツ(David Franz)は、後にハットフィルがで出入りしていたフォート・デトリックの伝染病センター長になっている。これら両名が国連の査察行動を隠蓑にペンタゴンとCIAの特務機関員としてイラク政権に対する諜報・謀略その他各種の挑発活動を行っていたことは、イラク側はもとより国連査察チームの主任査察官(1991～1998年)のスコット・リタ (Scott Ritter)によっても明らかにされている。

以上の補足についての詳細と情報出所は、以下を見よ。

<http://www.prospect.org/webfeatures/2002/06/rozen-1-06-27.html>

[Laura Rozen](#), "Who is Steven Hatfill?", *The American Prospect*, June 27, 2002.

<http://www.ctnow.com/news/local/hc-anthrax0627.artjun27.story>

Dave Altimari, Jack Dolan, and David Lightman, "The Case Of Dr. Hatfill: Suspect Or Pawn," *Hartford Courant*, June 27, 2002.

<http://www.sunspot.net/news/health/bal-te.anthrax27jun27.story>

Scott Shane, "Scientist theorized anthrax mail attack," *The Baltimore Sun*, June 27, 2002.

<http://www.latimes.com/news/opinion/commentary/la-000042993jun19.story?coll=la%2Dnews%2Dcomment%2Dopinions>

Scott Ritter, "COMMENTARY: Behind 'Plot' on Hussein, a Secret Agenda, Killing weapons inspections would clear way for war," *Los Angeles Times*, June 19, 2002.

Scott Ritter, *Endgame: Solving the Iraq Problem, Once and for All* (New York: Simon & Schuster, 1999).

以上

だるま

2002年7月7日記